



博士（人間科学）学位論文 概要書

エリートジュニアサッカー選手の心理特性
アスリートの感性研究へのアプローチ

Psychological Characteristics of Elite Junior Soccer Players

An Experimental Study on Kansei of Athletes

2003年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

志岐 幸子

Yukiko, Shiki

研究指導教員： 加藤 清忠 教授

現在の社会では、少年犯罪の多発や凶悪化、クローン技術や IT の進行による人間性の欠如、知識偏重やメディアによる子どもへの悪影響も指摘されており、人間性の回復が各方面より叫ばれている。21 世紀は、20 世紀における科学技術や IQ の向上とその弊害に対する反省を踏まえ、人間的な感性に目を向ける時代に入ったと言える。20 世紀のスポーツ界では「競技成績と人間性は関係ない」といった言葉がよく聞かれ、スポーツ界における IQ ともいべき競技成績や勝利といった、数値や結果そのものを追求する過程で人間形成に支障が出た場合が多々あった。したがって 21 世紀は、ジュニア期の育成において、単に選手の身体面にとどまらず選手の人間性の育成を重視し、人間的な感性をフルに働かせるための心理的要因の育成とそのための環境作りが急務であると思われる。

本研究の目的は、「競技成績と人間性は両立すべきである」という前提に基づき、スポーツ選手が発揮すべき感性とそのために望まれる子供時代からの環境条件について提言を行うことである。そこで、まず「感性」という言葉についての捉え方やスポーツの分野からの感性研究へのアプローチの必要性について第 1 章で述べた。これを踏まえ、第 2 章で一般の子供とジュニアサッカー選手の特性の相違を比較検討し、ジュニアサッカー選手は日常面での周囲とのコミュニケーションや調和がとれ、外向的であることを明らかにした。第 3 章～第 6 章では、J リーグ下部組織に所属する小中高校生のエリートジュニアサッカー選手 502 名を対象として、人間性に関与する日常面での感性に関わる心理的要因と、競技成績に関与する競技面での感性に関わる行動様式の特徴を把握し、両面の関連性と年代における変化について明らかにするため、アンケート調査を実施し、統計的解析を行った。さらに、心理的要因に影響を与える社会環境について把握すべく、家庭やチーム、学校、地域などの周囲の人間や選手を取り巻く環境との関わりを探ることにより、感性を発揮するための指針を検討した。

その結果、小中学生選手は日常面ではコミュニケーション、共感性、友好、

想像・表現、一体感、利己性、学校内向性といった因子が、競技面ではゲーム予知能力、一体感、協調性、エゴイズム、チーム緊張性といった因子が抽出され、日常面・競技面共に周囲と積極的に関わり、調和している傾向が強く見られた。高校生選手は日常面では利己的・多感、気づき・表現、一体感、冷淡さといった因子が、競技面では交流、消極性、エゴイズム、無責任といった因子が抽出され、日常面・競技面共に利己性のような不調和の傾向が強く見られた。また、日常面でのコミュニケーション、想像・表現のような調和の側面と競技面での一体感、予知能力のような調和の側面、さらに日常面での利己性のような不調和の側面と競技面でのエゴイズム、チーム緊張性のような不調和の側面が、小中学生選手を中心に関連性を示していた。これによりエリートジュニアサッカー選手については「競技成績と人間性は関係ない」とはいえないことが示唆された。しかし、同時に感性の発揮という点では高校生において問題があることも指摘された。特に周囲とのコミュニケーションが減少していく中学生から高校生への移行期が要注意時期になると見られた。感性を育成し、最大限に発揮するための対策としては、ジュニア期の段階から選手のプレッシャーを減少させたり、日常面・競技面、両面でのカウンセリングを施行するなどの心理的ケアを行うようなシステムの整備が必要であろう。

補遺で、感性の理想的な発揮状況について、成人のトップアスリートによるベストパフォーマンス遂行時の状況を参考にしながら検討したところ、無意識レベルでの情報処理がスムーズになることで最適な状況を生み出していることを見出した。さらに、ベストパフォーマンス遂行時の状況と人間性の面でマズローによって最高価値とされている状況は、同じ自己実現状態を示していると考えられた。また、選手が感性を育成し、発揮するためには、家庭を中心として幼少期から愛情に恵まれた環境下での周囲との交感が必要であることが示唆された。